

兵力 編成当時 一、二一七人  
復員人員 一、〇六三人  
編成以来の死没者 一〇四人  
生死不明者 五人

## 支那事変で決死隊

### — パシ—海峽で海没—

岡山県 片山定治

明治四十一年十月二十四日、岡山県御津町（現在岡山市）で生まれました。兵隊検査では甲種合格、当時甲種は余程体格が良くないとなれなかったのですから、自分でも自信を持った丈夫な体でありました。そのためか、今日九十歳を超したのに虫歯も無く元気で過ごしています。家は農業（米作）で、私は三人兄弟の長男でありました。

現役入営は昭和四年一月、岡山の歩兵第十連隊で、同年兵（七十人ぐらい）は一個班十九人程度で六個班

あったと記憶しています。教育は厳しいものでしたが、体力、気力もあり何とか持ちこたえて一期の検閲も終えることが出来ました。当時は平時でもあり、軍縮時代でもあったのか、満二カ月にならない昭和五年十一月に現役を満期除隊することが出来ました。

その後、昭和六年九月に満州事変が勃発し、私の入営していた第十師団が満州へ応急派兵するようになったらしく、いよいよ、戦時態勢へ移っていったのでしよう。除隊した私達も、いつ召集があるかもと心の隅で思っていたものです。しかし、事変も治まり、私も家業に精を出し、後に会社（日本生命）勤めをし、結婚もして平穏な暮らしをしていました。

この平穏な生活も破れる時が来ました。昭和十二年七月七日、支那事変勃発。その七月、私にも岡山連隊に入隊すべく召集令状が来ました。いよいよ来るべきものが来たと覚悟を決め、妻子を残して歩兵第十連隊へ入隊。その時は、事変勃発で召集兵が多く、部隊を編成して現地へ出発して行きました。あの時、我々兵隊は皆元気で張り切っていました。家族を残していま

したが、国のため、死んでもいいと思っていました。

死ぬ覚悟の我が連隊は、軍旗を先頭にして、岡山駅から列車に乗りました。有名な赤紫部隊の出陣でした。十二月九日宇品港出帆、大沽上陸、いよいよ戦場に着きました。ちなみに、部隊の「赤紫・毛利部隊会報（昭和六十二年十一月三十日―五十年祭会報）」にある黒住会長挨拶により当時を偲んでみます。

「昭和十二年八月九日は、歩兵第十連隊、赤紫部隊が支那事変に出動、岡山駅を後に征途についた日であります。滅私奉公の誠を捧げ、一一二六名の戦友を亡くしました。本日この尊い日に五十周忌を行い、生き残りの戦友相集い、赤紫、毛利部隊会を作り英霊をお祀りし、相互の親睦を兼ね三十年続けて参りました。

戦友会機関誌として発刊既に三十三号を続けております。……赤毛会現存者は推定一二〇〇名、一月九日にも赤紫元連隊長を失い物故覧に見られるように会員の死去も多い。今日出戦五十周年を開催され

……」

我が部隊は歴史のある部隊でした。大沽へ着いて港から部隊全員が上陸し、天津へ行軍しました。完全武装で重く、雨は降る泥の中の行軍、今思ってもゾッとします。しかし、当時は張り切っており、その時は滅私奉公で、歓呼の声に送られて来たのだから、死んでもいいと思っていました。家のことは心配ではあっても、その当時はどうせ生きて還れぬと思っていたので、家のことはあまり考えませんでした。

私の記憶では、天津着は三―四日かかったと思いますが、落伍したら殺されるので、落ちたら駄目と頑張って歩きました。行軍中の戦闘はありませんでした。天津で一時駐屯しましたが、それからは津浦線を南下し敵と遭遇しました。敵も強く、しかも死を覚悟していますから、そう簡単には逃げません。私は体は細かったのですが、その時は伍長勤務上等兵（当時兵長の位はなかった）で張り切っていました。中隊で二人ぐらいいました。下士官勤務者とは名譽なことで、夢見るように心中嬉しかったものです。しかし、駐屯中は

衛兵や兵器係などの任務があるので忙しく外出は出来ませんでした。

いよいよ第一線での戦闘です。我が第九中隊の所属する第三大隊が渡河することに決まりました。その時は第何中隊が決死隊になるかは決まっていませんでした。二十日、赤い夕陽が沈むころ第九中隊が渡河することに決まりました。中隊長はにっこり笑ってこの命令を受けました。我々隊員は皆爪を切って封筒に入れ、手帳に遺言を書きました。この時の第三大隊の空気が悲壮なもので、私たちは今までの鉄道警備勤務とは違う、「いよいよ、今度は」と手を握り合って覚悟を決めました。

我々の部隊は滄州でも、郷土部隊の中でも幸運でした。決死隊の籤を引いた当時の大隊副官は戦後書いた郷土史の中に、「悲壮の中でも不思議に生死を超越してきたのは何故だったか」と戦場心理の微妙さを語っています。「これからは命（ミコトノ神様）として祀られる、楽になるのだ」。死ねば楽になるのだと、あの時私も思いました。第一中隊長菊池大尉らは黄河で戦

死、神として祀られたのです。

赤紫連隊長から、第三大隊全員に二合ずつの酒が配られました。心境は既に普通の酒でなく神酒だという気持ちでした。その時、一人の兵隊が「中隊長、この部隊にお化けがおります」と言います。何を酔って言うのかとよく聞くと「大便をしても一向に手応えがない、自分が大便をしても消えていく」と言い、皆大騒ぎでありました。しかし、豪傑が出て懐中電灯で見ると、糞が転がって消えていく。犯人は「糞ころがし」という甲虫であったという笑い話もありました。十二月では糞も凍る。渡河直前、我々の緊張も一度に吹き飛んだのでした。

決死隊は黙々と準備をしていました。その後、隊の幹部将校、准尉、曹長、軍曹等は皆戦死してしまいました。私の小隊では第一分隊長が残ったのみで他の下士官も戦死しました。私は第三分隊で生き残り残りました。運命というものはそういうものなのでしょう。

敵の陣地も完全に出ており、トーチカもありました。我々は渡河してこれを攻撃するのですが、向こう

からは我々が見えるのですから戦死者は出ます。隊はバラバラになってしまいました。行かなきゃならないけれど、やはりいざとなると皆命は惜しい。一番先に出した者は狙われるが、狙われるだけで、次の者が本当に狙われて弾が当たるのです。戦闘というものは弾をくぐって初めて度胸ができるものです。私も張り切っていました。どうせ死ぬんだと思って私は決死隊に出て突撃しました。そのために助かったと言えるかも知れません。

我々は夜行軍をして渡河点へ着いて、初めの攻撃を行いました。渡河は、工兵が折畳み式の舟艇を担いで来て、組み立て水に浮かべました。我々はそれに乗りエンジンをかけてサバッと出ます。その時、敵は気が付いて兵力を増援して陣地に着き、我々を撃ってききました。我々は舟艇の中で擲弾筒を撃ちました。上陸突撃する前に撃ったのですが、舟の底は薄いので筒の射撃の衝撃で穴が開いてしまいました。そこで私が着ていた外套の頭巾を取ってその穴に押し込んで浸水を止めました。直ぐに上陸、突撃ですので、そのことを工

兵に言う暇などありません。

工兵の舟艇はそのまま次の隊を乗せて河を渡ってきました。しかし、多くの人が乗ったため、私の押し込んだ頭巾が取れ穴から水が入り、皆あわてて舟は沈み、十九人が戦死してしまいました。一艘には二個分隊近く乗っていたのでしょう。我々は重機関銃と共に敵を追撃しました。結局第二陣が水没してしまいました。しかし、部隊は黄河渡河作戦に成功しました。その日は十二月二十三日でありました。

次の作戦である滕县城の戦闘は、昭和十三年三月十五日には県城付近に到達したのですが、敵の兵力は多く、城内にはいっぱいいました。これを攻撃することになりましたが大激戦でした。連隊長のおっしゃるには予想外の頑強な抵抗であったそうです。

敵は司令部を狙って攻撃してききましたので、我が第十連隊長赤紫大佐は懸命であったのです。はじめは城壁まで到達し城壁に登ることが出来たのですが城内の敵は逃げないで抵抗していました。我々はこれを撃退するため突撃命令で突っ込みました。その後、敵の投

げた手榴弾が破裂し私は足を負傷し、担架で運ばれ野戦病院に入院し後に後送されました。病院には五カ月ぐらいいて、ようやく退院ということになりましたが、結局この負傷が原因で内地帰還となったのでした。

昭和十四年十月、戦友を残して自分だけ帰る気にはなれず、後ろ髪を引かれる思いで送還されたのです。しかし、その後の部隊は随分と激戦をし、赤紫部隊長も負傷したのですから、黄河の渡河戦の決死隊で生き残り、また、滕県城の突撃では負傷で内地送還となりましたが、もし負傷していなかったら後の戦闘で私はおそらく戦死していたでしょう。

内地に帰って家業をしていましたが、大東亜戦争が勃発し、年と共に戦況が悪化してきたので、昭和十九年六月召集令状がきました。いよいよ来たかと思いましたが、召集部隊は、前と同じ第十師団でした。この頃は「鉄兵団」の通称で呼ばれており、フィリピンのルソン島へ行くことになりました。当時は、フィリピンのレイテ島の戦は大東亜戦の天王山と呼ばれていま

したが、米軍の兵力に追われていて、決戦はルソン島に移っていった時でした。

しかし、我々の船団はバシー海峡で魚雷攻撃を受け、私はブイにつかまっていました。黄河の渡河戦で生き残り、滕県城の突撃で負傷し命永らえましたが、いよいよ海の藻屑となるのかと覚悟をし、家族の顔を思いつつブイにつかまっていたのです。幸いにも駆逐艦が救助に来て私を拾い上げてくれ助かったのです。しかし、私の筋骨は折れていたもので、台湾の高雄の病院に収容されることとなりました。もし、救助され部隊に帰っていたら、ルソン島の激戦で鉄兵団の一員として戦死していたことは確かであったと思います。

終戦で故郷に帰ることが出来ましたが、軍歴は十一年二月半ということで年金恩給には数カ月足りないということでした。しかし、支那事変の黄河渡河の決死隊で九死に一生を得、滕県城の負傷で次の諸作戦に参加せず命永らえ、また、バシー海峡では鮫の餌食にならず駆逐艦に救助され、負傷していたために、フィリ

ピンのルソンの戦で玉碎もせず帰還出来ました。二回の戦傷が無ければ当然死んでいる体であることを思えば、恩給問題などどうでもよいと思っっています。それより、共に戦い戦死した戦友を未だ忘れえず冥福を祈っております。

## 【解説】

第一線の将兵は、断片的な状況しか判らず、その局地、局地での戦闘については詳細に知っているだけであるで、その全体概況については、昭和十二年末から十三年にかけての黄河作戦における第十師団の状況を『戦史叢書』により概説をしてみる。

津浦線（天津―浦口）を南下した第二軍の第十師団は十月三日徳県を占領し、爾後、同地付近に兵力を集めていたが、済南に前進すべき命を受け、十三日恩県、平原を、二十一日陵県を占領した。

第二軍は黄河北岸地区の山東軍を撃滅することに決し、十一月、津浦線両側地区を黄河に向かい急進し黄河北岸地域を掃蕩した。山東軍は退却にあたり黄河鉄

橋を根本的に爆破してしまった。第二軍は、黄河北岸掃蕩作戦が意外な進捗を見せたので、ただちに黄河渡河作戦を実施することに決した。

（片山氏の部隊は、掃蕩作戦後、黄河渡河作戦に参加することになった。）

敵の山東軍は総兵力約十万と推定されていたが、第十師団は十二月二十三日二十時、渡河を開始し、奇襲に成功して対岸を占領し、引き続き追撃戦に移り、二十五日龍山を占領した。

第二軍は第十師団と本川旅団に済寧―蒙陰の線に向かい追撃を命じた。第十師団は二十六日済南を占領し、敗走する敵を追撃して、一月一日肥城、泰安を、四日兗州、曲阜を、十一日済寧を攻略した。

第十師団は昭和十三年二月上旬、兗州、済寧、鄒県地区の治安確保に任じていたが、山東軍の攻撃を受けていた。

第二軍は三月、第十師団に「滕県付近の占領と大平邑を確保すべき」ことを命ぜられた。

第十師団の瀬谷支隊（歩兵第十連隊はか）は三月十

四日払暁、両下店付近から作戦し、敵を撃破して十五日夕には滕県付近に達した。その戦闘後、支隊は台児荘の作戦に参加したのである。

黄河渡河の第一線決死隊の舟は、聞き取り証言者片山氏等に乗せ無事着岸したが、第二陣以下は強行渡河となった。しかも、その舟は擲弾筒射撃で舟底に開いた穴から水が入り、十九人は対岸へ到達せず黄河の水底に沈んだという。「郷土部隊戦記」によれば、その状況を次のごとく記している。

『「わあー」突然、前方で悲鳴が上がった。機関銃第三中隊（杉山隊）の第一小隊と第九中隊指揮班に乗せた舟だった。何ともいえない異様な叫び声だった。日笠小隊の舟に穴が開き、一瞬のうちに全員が黄河の濁流にのまれてしまったのだ。

自分の目の前で、この悲劇を見た当時の小泉軍曹は「私の目の前で信じられぬことが起こった。夢を見ているようだった。亡き戦友を悼むために、真実をいうのがいいのか、壮烈な戦死だったという方がいいのか

……、あのハラワタをえぐる悲痛な叫び声が今なおそこに残っている」と言われた。」

夫人と一児を遺して亡くなられた日笠小隊長をはじめ、戦没者の名を記している。それらの人の遺骨箱には、前日残した遺髪や爪を入れたという。「カタキをとらせてくれ！」と殺気立った第三小隊の兵を、幹部はなだめるのが大変だったというが、幸いにも工兵四人、歩兵三人は奇跡的に助かったという。

次に片山氏が負傷した滕県城攻撃について、「郷土部隊戦記」から抜粋し解説する。

十六日午前六時半行動開始し、いよいよ滕県城攻撃に取り掛かった。第三大隊は河を隔てて南から、第一、第二大隊は東方の外城からの攻撃であった。

滕県城は巨城である。高さ一メートルに煉瓦を積み上げてあり、その上の幅は五メートルもある。自動車は城壁の上を自由に通れるという今までに見たこともない鉄壁の城である。しかも外側には深さ三メートルの塹を巡らしてあり、本城の東側には外城がある。片

山氏所屬の第三大隊は後方へ迂回して、南東から攻める。歩兵第十連隊独自での滕県城攻撃である。

第三大隊は、片山氏が言われる通り、敵の必死の防戦に死傷者が続出した。煙幕を焚いて河を渡り、第九、第十中隊が突進した。しかし、歩兵だけでは厚い城壁は破れないと、赤紫連隊長は工兵一中隊、野砲、野戦銃砲、銃砲兵一大隊を指揮下に入れ、十七日午前七時より砲撃を開始し、城壁破壊砲撃により突破口を開いた。特に重砲は凄かった。

耳をも聾する砲声の中、南門からは第九中隊（片山氏所屬）が大歓声をあげて城壁下まで突進したが幹部がバタバタと戦死、その屍を越えての突入だった。だが堅固な城壁は砲弾でも崩れず、各中隊はいったん後退。敵の逆襲を防ぐため民家に放火、黒煙が上がった。

午後の砲撃で城壁の一角が崩れ出した。この機に第九中隊が突進、第一小隊長代理の岩本曹長が工兵の梯子で単身城壁にのぼるが、一本では長さが足りぬので途中で梯子を掛け直しよじ登り、拳銃と軍刀で敵一、

三人を倒し、みごと一番乗りをした。

当時、第三大隊の将兵は九一二人であり、岩本曹長に続いて、午後五時、城壁東南門に日章旗を掲げた。敵からは文字通り手榴弾が降るようであった。その一発により片山氏は足を負傷し後送されたのである。城壁は占領したが、市街には敵が充満していた。敵は西門へ殺到し将棋倒しとなりながら敗走したという。

## 河南作戦の惨状

栃木県 乙川 壽

私の家族構成は、両親と兄弟七人で女子は一人、私は四男でした。家は小作農家で、自作は三反歩で全耕作地は一町五反歩ほどでした。

当時村の世情は大金持ちは一部の人たちで、大部分の人たちは貧しい生活をしていました。一般的には三度三度の食事が出来ることを喜んで働くという程度でした。